

特定非営利活動法人サロン 2002

《2014年7月 月例会報告》

FIFA ワールドカップ・ブラジルを語る

－観戦者・旅行者・研究者の立場から－

本多 克己 (株式会社シックス)

笹原 勉 (日揮)

笠野 英弘 (筑波大学体育系)

【日 時】2014年7月21日 (月祝) 19:00~21:00 (軽く飲食しながら)
~23:00頃 (深くコミュニケーションをとりながら)

【会 場】フットボールサロン4-4-2 (墨田区江東橋4-16-5 SKビルB1)

【演 者】本多克己 ((株)シックス)、笹原勉 (日揮)、笠野英弘 (筑波大学体育系)

【参加者 (18名)】安藤裕一 (インターナショナル SOS)、梅本嗣 (広告会社)、大河原誠二 (筑波大学附属高校サッカー部OB)、笠野英弘 (筑波大学体育系)、金子正彦 (会社員)、岸卓巨 (中央大学大学院)、小堀俊一 (日本サッカー史研究会)、笹原勉 ((株)日揮)、嶋崎雅規 (帝京高校ラグビー部)、徳田仁 ((株)セリエ)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、本多克己 ((株)シックス)、村松邦子 ((株)ウェルネスシステム研究所/Jリーグ理事)、横山淳 (横河武蔵野 FC コーチ)、ほか4名
注1) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません (ご本人の了解が得られた方のみ公開しています)

注2) 本報告は、3名の演者が、それぞれの発表内容を文字に起こしてつなぎ合わせたものです。報告後は、3面の演者を囲んでのサッカー談義が延々と繰り広げられました。

<目 次>

I. 最高齢ジャーナリスト賀川浩さんと過ごした10日間

本多克己 (株式会社シックス)

II. 2014 ワールドカップ観戦ブラジル旅行

笹原 勉 (日揮)

III. 日・伯・独のサッカー比較ーサッカー観を中心に

笠野英弘 (筑波大学体育系)

I. 最高齢ジャーナリスト 賀川浩さんと過ごした 10 日間

本多克己（株式会社シックス）

今回のワールドカップでは、サロンの最年長会員で、私の会社の会長でもある賀川浩さんの、89 歳にして 10 回目のワールドカップ現地取材に、文字通り「カバン持ち」として同行して参りました。その 10 日間の取材ツアーについてお話したいと思います。

◆スライド 2

大会前に JFA から FIFA に向けて「日本の 80 歳以上の記者が 2 人取材に行きます」という連絡をしてもらっていたこともあり、現地では丁寧な対応をしていただきました。もう一人は牛木さんですね。このスライドにあるように、FIFA.com にも今大会の最年長記者として取り上げられました。

◆スライド 3

今回のツアーではセルジオ越後さんがツアー全体をコーディネートして下さり、「ぼくが通訳をします」ということで同行していただきました。写真はナタルのホテルでの朝食の様子です。

◆スライド 4

レシフェからナタルの間は、奥寺さんもツアーに同行されていました。ナタルでのギリシャ戦後、ホテルに帰ってきた賀川さんが暖かい紅茶を飲みたいということでホテルのバーに顔を出したところ、ちょうど奥寺さんもおられて長話となりました。セルジオさんも奥寺さんもサッカー界ではベテランになるわけですが、自分の選手時代も知ってくれている賀川さんの前では、一選手に戻ったようなリラックスした楽しそうな表情で話をされていたのが印象的でした。

◆スライド 5

レシフェでのコートジボワール戦前日に、スタジアムにあるプレスセンターで AD カードを作成してもらいました。もちろん、背にはサロンからプレゼントされたリュックを背負って。

◆スライド 6

翌日には、無事に 10 回目の現地取材を実現することができました。

◆スライド 7

ナタルのレストランで食事をしていると、偶然牛木さんも同じレストランにいらっしゃいました。こうして 80 歳以上の記者が揃って取材というのは、日本のサッカー界にとっても、そしてサロンにとっても誇らしいことだと思います。

◆スライド 8

ナタルのホテルの一室でテレビの取材を受けているところです。この他にもラジオの生番組に電話出演するなど、取材されることが多かったのも最年長ならではの、という感じでした。

◆スライド 9

現地のテレビの取材を受けている様子です。FIFA.com に紹介されてからは、「プレスセンターに行くと大勢に写真と一緒に取ってくれ、と言われて、人生で一番もてた（笑）」と賀川さんは笑い話にしていました。

◆スライド 10

これは、ナタルのホテルで中日新聞の取材を受けているところです。後ろに見えているのは同じホテルに宿泊していたギリシャ代表です。

◆スライド 11

ホテルにはギリシャのほか、アメリカ代表、さらにはアメリカ副大統領も宿泊していたとのことで、警察や軍隊によって嚴重に警備されていました。

◆スライド 12

ホテルの部屋からの風景です。

◆スライド 13

ツアー最終日にサンパウロに一夜泊したのですが、サッカーミュージアムがあるということで、立ち寄ることになりました。

◆スライド 14

ミュージアムはパカエンブスタジアムの中に設置されていました。

◆スライド 15

今年の4月に賀川さんの蔵書を神戸市中央図書館に寄託して「神戸賀川サッカーライブラリー」を開設したのですが、サンパウロのミュージアムは書籍やグッズだけでなく、いろいろな形で映像を楽しむこともできて、さすがブラジル！ まだまだ敵わないという印象でした。

◆スライド 16

今回、初めてブラジルに行って、個人的に一番印象的だったことは、ブラジル人はほんとうに日本のことが好きなんだな、ということでした。親日とは聞かされていたものの、直接接してみて、いたるところで実感させられました。

◆スライド 17

ナタルでのギリシャ戦翌日の地元の新聞の一面です。嘆き悲しむサポーター、ゴミ拾いをするサポーター、そして現地を訪れた高円宮妃殿下の写真が掲載されていました。試合に関しては書くべきことないということなのかと思うと悲しいですが、紙面にも日本への愛が感じられました。

◆スライド 18

次は、開幕戦の翌日の新聞です。西村主審がブラジルに PK を与えたシーンに、「ARIGATO」ということで、ブラジルの日本への愛情はさらに高まったのではないのでしょうか（笑）

◆スライド 19

試合会場周辺に設置された大会スポンサーのバドワイザーのバーです。皆日の丸のはちまきをしてくれていて、日本人としてはうれしい限りですが、ギリシャの人たちはどんな心境だったか心配です。

◆スライド 20

会場整理のお兄さんも、日の丸はちまきです。写真を撮ろうとすると仕事そっちのけでポーズを取ってくれました。

◆スライド 21

街中の店のウィンドーにも日本びいきが見られます。一番好きな国が日本だとすると、一番嫌いな国もあって、

◆スライド 22

こんな感じです (笑)

◆スライド 23

最初にワールドカップを現地観戦したのは、98年のジャマイカ戦でした。そのときリヨンのスタジアムで君が代が演奏された時に、「今からジャマイカという国と戦うんや！」と強烈に感じました。そして試合の後にジャマイカ人から「Good game だった」と言われて、その時は「そちらにとってはグッドやろうけど、こちらにとっては全然グッドやないで」と思ったのですが、その後ワールドカップ観戦を重ねるたびに、どの試合の後にも、どの国の人からも「Good game だった」というコメントが聞かれて、国と国の戦いということと同時に、一緒に楽しむこともワールドカップなんだということが実感として理解できるようになりました。

◆スライド 24

試合前、スタジアムの周辺では、両国のサポーターによる写真撮影がいたるところで行われます。これから戦う相手であるという感覚と、ともに祭りを楽しむ仲間だという感覚が同時に感じられることとなります。

◆スライド 25

ピットブルというアーティストによる、大会オフィシャルソングの一節です。

自分の旗を掲げよう、自分がどこから来たかを示そう、ぼくたちはひとつだと示そうというような歌詞ですが、見事にワールドカップの本質を表現していると思います。

自分の国を実感し、世界はひとつだと実感する、世界最高のお祭りですね。

◆スライド 26

さて、最後のスライドはホテルの裏のビーチで大西洋を眺める賀川さんです。「この海の向こうにアフリカがあって、奴隷がたくさん連れて来られたんやな。ヨーロッパには何度も行ったけど、大西洋をゆっくり眺めることはなかったのに、89歳になってこちら側から大西洋を眺めることになるとはなあ」などという会話をしながら、夢はロシアにつながっていくのでした。

II. 2014 ワールドカップ観戦ブラジル旅行

笹原 勉 (日揮)

私は、試合の観戦はするものの、ワールドカップにかこつけて、その国を旅行することに重点をおいている。今回もツアーでなく自己手配の旅行であり、そのような旅行をしたいと思う方の参考になるよう、旅行者の視点から発表する。

◆スライド 3

私は、今大会で5大会連続の現地観戦/観光旅行となった。最初に観戦した98年のフランス大会では旅行者のツアーに参加したが、出発直前で観戦チケットが取れないとの連絡を受けた。チケット代

の減額と見舞金のためツアー料金が極めて安くなったので兎に角参加。日本 vs クロアチア戦はダフ屋からVIP席のチケットを入手、日本 vs ジャマイカ戦は取引先から頂いた接待チケットが余っており、無事観戦できた。

それ以降の大会では観戦チケット入手ほか、すべての旅行手配を自分で行っている。

2002年の日韓大会は別府・湯布院を観光しながら大分の3試合を観戦。日本在住者は応募できなかったのもので、当社の海外事務所を受け取り住所として申し込んだ。会社の接待用チケット入手担当となり、同様の手法で多くのチケットを入手した。駐在中のサウジアラビアの顧客が、札幌のドイツ戦を、遠方を理由にキャンセル。譲り受けて観戦した(0-8で負けてしまい、顧客は行かなくてよかった)。

06年のドイツ大会と10年の南ア大会は北京駐在中、17日間の一時帰国休暇を使い、帰国せずに観戦に出かけた。ドイツ大会は、観戦を日程の前半に集中させ、後半は地方のビールを飲み歩く旅行とした。

南ア大会では初めて家内を帯同。サッカーやスポーツの観戦にまったく興味を持っていなかったが、現地で体験したワールドカップの雰囲気(及びイケメン選手)のとりことなり、今回は彼女の方が積極的であった。南ア大会はチケット抽選の当選確率が高く、旅程が組めなくなってブラジル vs ポルトガル(グループ・リーグ)を知人に、オランダ vs どこか(準々決勝?)をスタジアムで会った日本人に売る羽目になった。

◆スライド4

今年のブラジル大会は、6月18日夜、日本発。4都市を回って29日夜帰国。各地で2泊程度しかできず、大変あわただしい旅行であった。

◆スライド5

FIFAのHPでの個別の試合のチケット販売は、いつもスライドのような手順。今回は今までより発売開始が遅れた気がする。

私は、最初の抽選ステージに申し込んでいる。この時は出場国さえ決まっていないので、どの土地に行きたいかを基準に申し込みをしている。

◆スライド6

今回のチケット価格はスライドの通り。私はカテゴリ1を申し込んだ。

◆スライド7

具体的に、応募した試合と当選した試合はスライドの通り。組み合わせ抽選の結果、好カードも渋いカードもあり。その後、サロンの本多理事より日本 vs コロンビア戦のチケット入手可能との情報をいただき、日本戦を見たい家内の強い希望で観戦を決定。移動が不可能になるメキシコ vs クロアチア(レシフェ)とスイス vs ホンジュラス(マナウス)を諦めた。この2試合のチケットはFIFAチケットセンターのRESALE手続きにかけたところ、見事売却することができ、手数料を除いてチケット代が戻ってきた。

◆スライド8,11

ブラジル行の航空券は、北米経由以外に様々なルートがありそうだったので、まず近くのHIS店頭で相談したところ、トルコ、カタール、アブダビ(エティハド航空)などの中東系が安く、時間も変わらないことが分かった。以前アメリカ経由で南米に行った時、乗継でも出国手続きが必要で、しかも経由地のロスで荷物を積み間違えられて2日間荷物なしで過ごしたことがあるので、中東経由に決定。出発の2ヶ月前にネットで探したところ、ある旅行社のサイトで、ドバイ経由エミレーツ航空の

チケットが見つかった。その時点では他の中東経由の便はまったく空席がなかったので、設備とサービスが素晴らしいという噂を信じてエミレーツを購入。中年夫婦の旅行で、帰国の 10 時間後から仕事だったため、贅沢をしてビジネスクラスとした。機内のサービスはもちろん、発着/到着時にホテルまでリムジンの送迎があり、ドバイでの乗継ではホテルまで用意されていて、大変快適であった。

◆スライド 9, 11

私が JAL Global Club (JGC) のメンバーなので、国内線は同じワン・ワールド・グループの TAM 航空にした。格安運賃で国内を回れるブラジル・パスというのがあると TAM の HP では紹介されていたが、旅行社によると路線ごとに買った方が安かったらしい。JGC の特典を活かして出発時にはビジネスクラスラウンジで休もうと思ったが、国内線にはビジネスクラスというものがないらしく、ラウンジもなかった。預け入れ荷物には一応「優先」のタグが付けられたが、優先的に出てきたことは一度もなかった。それでも、心配していた遅延がほとんどなく、助かった。搭乗時刻を出発 45 分前に設定しているのが奏功しているのかも。

◆スライド 10

私は、時差調整のため、搭乗するとすぐに時計を到着地の時間に替え、食事や睡眠等の生活リズムを合わせることにしている。帰国時にもそうしたのだが、日本時間の朝 1 時過ぎにふと目を覚ますと、なんとブラジル vs チリのトーナメント 1 回戦を機内で生中継しているではないか！ これは見ないわけにはいかない。一度信号が途絶えている間にチリの同点ゴールが決まった以外、快適に延長戦まで観戦できた。ところが、これから PK 戦という時に、ドバイ到着のため機内テレビが終了。欲求不満で着陸を待っていると、CA さんが「PK 戦 3-2 でブラジルが勝ちました」と放送。どこからともなく歓声が沸いていた。

◆スライド 12

今回の旅行手配で一番大変だったのはホテル、特にクイアバでの宿泊。私は通常 Trip Advisor、Booking.com といったサイトでホテル予約をするのだが、クイアバはまったく空室が見つからなかった。当初訪問地を決める際、ブラジルらしいところとして、アマゾン観光のマナウスか、世界一の大湿原パンタナールの玄関ロクイアバか、迷っていた。マナウスを諦めてクイアバにしたので、宿泊も市内でなくパンタナールにと思ったが、そこもなし。Booking.com で、『地球の歩き方』になかなか良いと紹介されていたクイアバ北東のギマラインス高原の良さげなロッジに、試合観戦後 2 泊分空きを見つけたので、とりあえず予約確保 (5/30 日までに確定すればよし)。試合前の 2 日間は全然空室が見つからなかった。

中塚理事長が知り合いのブラジル人を我が家に連れてきた際、困ったことがあったら連絡をくれと言ってくれていた。困ったことができたので連絡すると、何とあつという間に 5 件ほど候補のロッジをパンタナールに見つけてくれた。その内の 1 件を選び、先方はポルトガル語 (自動翻訳で何とか理解できた)、こちらは英語というメールのやり取りの結果、宿泊料を事前送金し、予約を確保できた。

サンパウロとリオは、コストパフォーマンスが良いと言われている Ibis ホテル (Booking.com には出てこない) を同社の HP から予約した。ちなみに、最終日のリオの Ibis ホテルに着いたら、レセプション脇のバーで藤田俊哉氏が飲んでいた。

◆スライド 13

費用総額は 2 人で約 250 万円。約 7 割がビジネスクラスとした国際航空券。これを除けば一人 37 万円程度なので、まあまあな値段かと。

◆スライド 14

前回の南ア大会でも日本のメディアでは治安問題で騒いでいたが、現地では何も危険な目には遭わなかった。今回も似たようなものだろうと思いつつも、当然ながら必要な注意は欠かさなかった。

海外経験の豊富な知人が、ブラジル旅行中に CITI Bank の ATM から現金を引き出した後、同じ口座から身に覚えのない引き落としが何度もなされたと聞いた。同行した家族も別の銀行で同じ目に遭った由。口座の金を最低限にしておくことをアドバイスされたが、そうすると日々の自動引き落としに影響が出るのでそうもいかない。そこで、『地球の歩き方』に広告が載っていた「Neo Money」というカードを作って持参した。ネット・バンキングで必要な額を随時入金でき、海外の ATM で出金できる。全く問題なく使用でき、大変安心、便利であった。その他、ドルの現金をあちこちに分散して所持していたが、どこに入れたか忘れてしまい、すべて回収できたか自信がない。

ATM で現金をおろしている時、写真を撮影している時など、夫婦のもう一人が周囲に目を配ることは忘れないようにした。会社の海外安全講座で、ホテルや銀行から出たとき 3 秒間、周囲を見渡すことにより、泥棒の標的になるのを避けられると教わり、なるべく実行した。もう一つ。「おかしいな」と感じたら、予定していた行動を変更するよう習ったが、幸いそのような目には遭わなかった。

スライドにはないが、黄熱病予防注射を打っていった。事前の徳田さん情報で、日本の虫除けは効かないと言われていたので、特別な成分の入ったスプレーを持参。使った時は良かったが、高原で油断していた時に刺された箇所がいつまでもかゆく、まだ跡が残っている。

徳田氏：私が言ったのは、かゆみ止めがないということでしたが。

→ そうでした。かゆみ止めも持参しました。

◆スライド 15

ここからはフォト・ギャラリーです。

こちらがブラジル到着翌朝、初めての外出時の風景。かなりびくびくしていたが、絶対避けるよう言われていた路上での携帯通話やネックレス着用などを、現地の人は普通に行っているの、拍子抜けした。

◆スライド 16

「コンフェ・イタリア」と呼ばれるパンやケーキを売り、食事もできる店。

◆スライド 17

ホテル周辺。泊ったホテルは Paraiso (天国) という地区。

◆スライド 18

サンパウロの空港のビュッフェの食事。料理の乗った皿をはかりに載せて料金を決めていた。似たような皿 2 つで 2500 円位取られた。

◆スライド 19

フォルタレーザのホテル。一番高かったが、設備は…。マンションの 1 室のようだった。

◆スライド 20

ホテルのレストランで食べた定食。肉に味があり、おいしかった。

◆スライド 21,22

フォルタレーザの名前の由来となった要塞。現在は軍隊の司令部だが、見学可。ボランティアのガイドさんが案内してくれた。

◆スライド 23,24

要塞の目の前にある市場。市場と言っても肉や野菜を売っているのではなく、土産物屋の集まり。このあたりは旧市街だが、特に危険なおいしなかった。

◆スライド 25

フォルタレーザのビーチ。右奥にファンフェスタが見える。

◆スライド 26

ファンフェスタ近くで食べたエビのグリル。おいしかった。

◆スライド 27

スタジアムに行く無料シャトルバス。どこから乗るのか案内がなく、ファンフェスタで尋ねてようやく分かった。

◆スライド 28,29

バスを降りてから、かなり歩かされた。途中にはスポンサーと関係ない地元の人の屋台が結構出ている。

◆スライド 30,31

観戦したのはドイツ vs ガーナ。ご存知の通りなかなか良い試合であった。今回のチケットは2枚ともこのあたりの席。

◆スライド 32

シーフードを煮た料理、ムサカ。二人前を頼んだところ、とてもおいしいのだが、二人で食べきれぬ量ではなかった。

◆スライド 33

クイアバ到着前に飛行機の窓から見たパンタナール

◆スライド 34,35

我々が泊ったロッジ。雨季には道路からの導入路が水で埋まるらしい。家族経営で、料理も奥さんの手作り。とってもおいしい。ビールは日本で見かけなくなった 250ml 缶。

◆スライド 36~40

観光はボートからの動物観察。鳥たちの種類がとても豊富。持参した双眼鏡が大活躍。

◆スライド 41

下の2枚がカピバラ。なかなか可愛い。

◆スライド 42

左上から時計回りに猛毒蛇、ボア・コンストラクター（アナコンダの類）、イグアナ、アリ塚

◆スライド 43

ワニは沢山いすぎて、慣れてしまった。

◆スライド 44

アクティビティの豊富な別のロッジに車で1時間かけて出かけたところ、セリエのツアー参加者に遭遇、一緒に遊んでもらった。ピラニア（左）を釣るつもりが、別の魚が2匹釣れた。

◆スライド 45

クイアバのスタジアムへは、ロッジで手配してもらった車で直行。高級そうな住宅地にあった。本多さんの報告にもあった、観客誘導の方も日の丸の鉢巻き。

◆スライド 46

隣の席はイタリアから来た日本人。その他半径20m以内は真っ黄色であった。

◆スライド 47

右上から反時計回りに時間が経過。ユニフォームの変化に注目。

◆スライド 48,49

試合後はクイアバ北東、車で1時間ほどのギマラインス高原のロッジに2泊。

◆スライド 50

リオでの宿泊はセントロ（旧市街）。古い建物が素敵だった。

◆スライド 51

大きなキリスト像があるコルゴバードの丘へ行きたかったが、登山列車のチケットが売り切れで断念。やはり山の上からリオが見えるボン・ジ・アスーカルに行ってみたが、ロープウェーが長蛇の列、最低3時間は待ちそうな雰囲気なのでやはり断念。

徳田氏：市内からシャトルバスが出ていた。キリスト像を見なかったのはもったいなかった。

◆スライド 52

シュハスコはさすがにおいしかった。でも、そんなにたくさん食べられるものではない。

◆スライド 53

リオの風景

◆スライド 54

リオのサンバ・バーで相席となったフランス人夫婦。ナントにお住まいで、私が初めて観戦した日本 vs クロアチア戦をスタジアムで見ていたとのこと。プラティニ時代のフランスチームの話題で大変盛り上がり、サンバの生演奏をよく聞いていなかった。

◆スライド 55

パンタナールのロッジで一緒だった、日系人のご家族ツルマキさん。彼らの通訳のお蔭で大変助か

った。後ろにはロッジの主人スペイン人のマリオとブラジル人のフローラ。

こういった、人との出会いが旅の醍醐味。特にワールドカップで出会う人は目的が同じなので話が合う。

◆おわりに

前回大会終了後は、次回はブラジルで・・・と盛り上がっていたが、今回は、ロシアで会おう、という言葉があまり聞かれない気がする。

私は、今大会で連続観戦を5大会に伸ばしたが、観戦した日本戦の連敗記録も4試合に伸ばしてしまった。次回は6大会連続を目指すものの、日本戦は見ないようにする。

Ⅲ. 日・伯・独のサッカー比較ーサッカー観を中心に

笠野英弘（筑波大学体育系）

◆スライド2

まず、月例会にはあまり頻繁に参加できていませんので、私自身の自己紹介からはじめさせていただきます。私は大学卒業後、サッカーを続けたいとの思いから、ドイツにサッカー留学に行きましたが、渡独してから3か月後に前十字靭帯断裂→手術と8か月のリハビリ→1年で帰国となりました。帰国後、今日も参加されている徳田さんの会社（セリエ）で1年弱働かせていただき、その後は、日本スポーツ振興センターで約6年間働き、totoの助成業務などに携わりました。そこで仕事をしながら、中塚理事長に推薦書を書いていただき、筑波大学の社会人大学院に通って修士をとりました。そして、博士課程に進学して3年後に、単位取得満期退学をし、筑波大学に転職しました。

現在の私の研究テーマは、簡単にいうと、サッカー協会のようなスポーツ組織とサッカーをしている人のサッカー観のようなものとの関連についてです。その研究の一環として、昨年度はドイツに、今年度はブラジルに、インタビュー調査に行きました。

今日は、ブラジルでの調査について、あまり堅苦しくならないように発表させていただきたいと思います。また、私の義父は日本でも活躍した元ブラジル人サッカー選手で、彼に今回のブラジルでの通訳や案内等をお願いしました。W杯のチケットは入手できずにいたのですが、今回は研究目的ということで、現地の雰囲気味わえれば良いということで行ったところ、ブラジルvsチリのチケットを、マリーニョさんのおかげでキックオフ30分前という、直前に入手できたため、その試合観戦の様子もお伝えしたいと思います。

なお、今日は私のドイツ留学時の友人の横山さん（横河武蔵野FCコーチ）と社会人大学院在学時の同期（人生においては先輩）の村松さん（Jリーグ理事）にも、サロンの会員ではありませんが、お声かけさせていただき、参加していただいています。

◆スライド3

ということで、今日の発表は、まずW杯の観戦と、マリーニョさんの親戚の、いわゆるブラジルの一般家庭に泊めていただいたので、その様子をお伝えしたいと思います。その後、私の研究の一部について発表させていただきます。

◆スライド4

まず、キックオフ30分前に入手したチケットですが、マリーニョさんの知り合いの代理人の方から1枚余っているとの連絡があり、せっかくの機会ということで、マリーニョさんが私に譲ってくださって観戦することができました。カテゴリー1で440ブラジルリアルと書いてあったので、およそ

20,000 円くらいだと思います。

◆スライド 5

これは、OURO MINAS という 5 つ星のホテルで、ブラジル代表が宿泊していたようです。ここのロビーでチケットをいただきました。

◆スライド 6～8

キックオフまで時間がなかったので、車で入ることができるぎりぎりのところまで送ってもらい、そこからダッシュで（走って）スタジアムに向かいました。ゲート前で、ボランティアの方に写真をとっていただきました。ボランティアの方はこの（スライド 8 の）ようなシャツを着て帽子をかぶっていたのでわかりやすかったです。また、この（スライド 9 の）ような手の形をした大きな案内板も持っていました。

◆スライド 9

せっかくなので、スタジアム到着後すぐに、オフィシャルショップでブラジル代表ユニフォームを買いました。229 ブラジルリアルで購入したのですが、翌日、街のスーパーでは、まったく同じオフィシャルのシャツが 149 ブラジルリアルで売っていました。。

◆スライド 10、11

会場に着くと国歌が流れ始めていて、例の、音楽が終わっても国歌を歌い続けるという映像を撮ってきましたのでご覧ください。

◆スライド 12、13

そして試合が始まりましたが、非常に良い気候で、後ほどまたお話ししますが、ブラジルに住む親戚で豪華客船の料理スタッフとして世界中を回ったことがある彼が、ここの気候は世界で最も良いというくらい、過ごしやすい気候でした。ただ私はダッシュで（走って）来たので 1 人だけ汗だくでした。

◆スライド 14

こちらは記者席の写真ですが、多くの記者席がありました。

◆スライド 15

こちらは VIP 席なのかどうか確認することはできませんでしたが、結構空いている席があり、一番良い位置なのにもったいないなと思いました。

◆スライド 16

これはブラジルがゴールを決めたときの写真で、大変盛り上がっていました。

◆スライド 17、18

ブラジルでの試合観戦は危ないという話もありましたが、このような小さな女の子やおしゃぶりをしているような女の子など、家族連れの観客も多くいました。カテゴリー 1 ということで少し高めのチケットだったので、それなりの裕福な人たちが来ていたのかもしれない。

◆スライド 19

これはネイマールが PK を決めたときの映像です。

◆スライド 20

これは、チリの最後の選手が PK を外した瞬間ですが、あまりの歓声と盛り上がりにはびっくりしてカメラのボタンを押してしまい、この動画は 3 秒で終わってしまっています。

◆スライド 21

その後すぐに撮り直したのがこの動画です。自分の声すら聞こえないくらい状況でした。日本で、テレビで観ていた友人たちは、とても感動した試合だったと話していましたが、実際の観客席の雰囲気は、少し怖い状況でした。もしブラジルが負けたら暴動が起きてしまうのではないかとこの雰囲気、試合終盤は、とにかくブラジルに勝ってほしいと願っていました。

◆スライド 22

無事にブラジルが勝利したので、帰りは特に問題もなくスムーズにみんな帰っていました。

◆スライド 23

こちらの写真はスタジアム到着時ですが、キックオフ直前だったので全く混んでいませんでした。

◆スライド 24

スタジアムまでの道には軍隊や警察がいたので安全でした。

◆スライド 25

ここで、私が訪れたベロオリゾンテ市について少しお伝えします。ベロオリゾンテはミナス・ジェライス州の州都で約 237 万人が住み、サンパウロ、リオ、サルヴァドールに次ぐ第 4 位の都市です。計画的につくられた都市で、最近急激な都市化の強い影響を受けているとのこと。先ほどもお伝えしましたが、とても過ごしやすい気候の都市です。

W 杯会場となった競技場はミネイロン競技場で 62,387 人収容でしたが、私が観戦したブラジル vs チリの観客数は、競技場の発表ではおよそ 58,000 人とのことでした。

◆スライド 26

これは山の上のほうからベロオリゾンテ市を撮った写真ですが、手前の山の近くに富裕層の豪邸が集まっています。

◆スライド 27

これはその山の上でココナッツジュースを飲んでいるところですが、私と一緒に飲んでいる彼のマドリーニャ（第 2 の母）に私の妻がなっています。彼らは双子ですが、もう一人の彼のマドリーニャ（第 2 の母）には私の妻の姉がなっています。私は宗教のことは良く知らないのですが、私の妻がマドリーニャだと、結婚した時点で私も彼のマドリーニョ（第 2 の父）になるそうです。ということで、滞在中、彼は私にとっても良くなつてくれました。

◆スライド 28

これはお昼の食事です。マリーニョさんの妹さんの家に泊めてもらっていましたが、夫婦共働きで、ご主人は建設関係の仕事、奥さんは歯医者で、いわゆる中流層の家庭だとおっしゃっていました。

ブラジルでは、中流層でもお手伝いさんがいる家庭がほとんどで、こちらの家庭でもお手伝いさんがお昼ご飯をつくったり、子どもたちの面倒をみていました。料理は、ブラジル伝統料理のフェイジ

ョンなどで、とてもおいしかったです。

◆スライド 29

これは、ベロオリゾンテ市内のファベラで、貧困層の地域だそうです。

◆スライド 30

これはベロオリゾンテ市内の有名な教会で、オスカー・ニーマイヤーという著名なブラジル人建築家が設計した教会です。

◆スライド 31

これは幼稚園ですが、日本ではあまり見ない色使いだと思って写真を撮ってきました。

◆スライド 32、33

私は今回はじめてブラジルに行ったのですが、ブラジルのイメージは、いわゆるストリートサッカーがあらゆるところでみられると思っていましたが、今では、ベロオリゾンテのような都市ではほとんどみることができないとのことでした。

◆スライド 34

実際に、私が泊めてもらった家の子どもたちも、このように長い時間インターネットのゲームなどをしていました。W杯期間中、子どもたちは約1か月間学校がお休みとのことでしたが、危なかったり、近くに友達がいなかったりという理由で外に遊びに行くこともあまりなく、暇そうでした。

◆スライド 35

これは、その家のリビングで、ここで親戚が集まってW杯の試合観戦をしていました。

◆スライド 36

これは、その家のベランダで、プールがありますが、中流層であれば普通のようなようです。また、W杯期間中ということで、国旗を掲げている家も多くみられました。

◆スライド 37

この写真の彼が、先ほどお話した豪華客船の料理スタッフとして世界を旅した親戚ですが、彼やマリーニョさんから聞いた話によれば、ブラジルでは経済格差が非常に大きく、富裕層は政治家になって自分たちに都合のよい法律や制度をつくっているといいます。そして、中流層はそれなりの教育を享受しているので、政府のやっていることが良くないということがわかり、政府批判をする人が多いといいます。例えば、ブラジルの公立の学校や病院のサービスは劣悪なため、中流層は私立の学校や病院を利用するので、支払っている税金に対する還元が何もないと批判しています。彼は、そのような批判のため、デモに参加していましたが、しばらくすると、デモも若者の出会いの場のような感じになってしまったため、デモ参加をやめたといっていました。そして貧困層は、政府が行う物資供給などの短期的なサービスで満足してしまい、教育もしっかりと受けていないので、中流層ほどは政府批判をする人は多くないといいます。ただ、経済発展により、貧困層から中流層になる人も多いため、政府批判やデモが拡大しているといいます。

このようなことで、彼は、W杯について、もちろんブラジルを応援しているが、これまでのW杯のなかでは最も盛り上がっていないといいます。

◆スライド 38、39

とはいつつも、こちらの方々はマリーニョさんの親友の方々ですが、家にみんなで集まって W 杯観戦をするというように、盛り上がっていないことはない様子でした。

そこで、マリーニョさんと親友の方々ともブラジルサッカーについていろいろとお話をさせていただいたのですが、やはり、遊ぶ場（遊びとしてのサッカーをする場所）の減少が、いま、一番の問題だと話していました。この減少には、都市化されることでのグラウンド自体の減少から、他のスポーツの選択肢が増えたことや、テレビゲームの普及、他の習い事などによってサッカーで遊ぶ子どもが減少したこと、さらに、親がクラブに通わせてサッカーをやらせることで、遊びのサッカーではなく、習い事としてのサッカーになってしまっていることなどが原因だと話されていました。

これを考えると、経済的發展で生活が豊かになっているにもかかわらず、人生を豊かにするはずのサッカーは弱くなってしまいうという皮肉な状況にあるのではないかと思いました。

◆スライド 40

ここからは、研究として 5 人にインタビューをしてきたのですが、その 5 人のインタビュー内容を簡単にお伝えしていきたいと思えます。

まず 1 人目は、アントニオ・ラセルダ氏（70）で、彼は、マリーニョさんがクルゼイロでプレーしていた頃のフィジカルコーチだったそうです。いまは元プロサッカー選手協会という組織で、恵まれていない子どもたち（13～18 歳を対象）に大会やイベントを開催するという事業のコーディネーターをしています。この「元プロサッカー選手協会」という組織は、元プロサッカー選手のセカンドキャリアを支援するための組織で、その大会やイベントに元プロサッカー選手を派遣する形で、セカンドキャリアの支援の 1 つとしています。その大会やイベントでは、子どもたちに遊ばせることを大切に、その中で才能のある子どもだけを地域のクラブに送ってトレーニングさせるということをしていました。彼も、先ほどのマリーニョさんの親友の方々との話と同じで、「遊び場」がないことがブラジルサッカーの今の問題だといっていました。

◆スライド 41

これは、その「元プロサッカー選手協会」が入っているビルですが、「ピアザのビル」と書かれています。ピアザとは、1970 年の W 杯メキシコ大会のブラジル優勝メンバーの 1 人で、マリーニョさんの憧れの選手だといっていました。そのピアザ氏がつくった協会だそうです。

◆スライド 42

2 人目は、オマー・ウェルター氏（56）で、元プロサッカー選手協会の顧問弁護士です。彼は、17～27 歳までプロ選手でしたが、州の 3 部などの比較的下部のプロ・リーグの選手だったので、仕事と両立しながら生計をたてていました。そして、プロ選手を引退してからも、遊びでサッカーは現在まで続けているそうです。彼も、当時はどこにでも遊ぶ場所があったが、いまはなくなってきているといえます。また、サッカーについて、練習（トレーニング）は嫌いだったが、プロ選手という仕事としてやらなければいけないものとしてやっていたといえます。ゲームや試合は楽しく、またプロ選手の時期も、友達と遊びのサッカーをしていたといえます。あくまでもプロ選手は、他のサラリーマンなどの仕事と同じ「仕事」として捉えて、仕事がない日は友達とサッカーをして遊ぶというように、仕事（プロ）としてのサッカーと遊びとしてのサッカーを分けて捉えているように感じました。

◆スライド 43

3 人目は、ミナス・ジェライス州サッカー協会のカチータ氏です。「カチータ」はあだ名のようにですが、名刺にも「カチータ」と書いてあり、マリーニョさんも、あだ名での名刺にはびっくりしていま

した。彼は、ペロオリゾンテ市以外のアマチュア地域リーグのジェネラル・ディレクターという役職で、地域レベルのアマチュア・リーグの環境整備が目標であると話していました。その環境整備というのは、ユースのリーグや大会等のスポンサーをたくさん獲得することによって集めたお金や国からの補助金などを、地域レベルのアマチュア・リーグの施設や審判費用などにあてることだと話していました。

彼によれば、協会の第1の目的はブラジルサッカーを強くすることで、特段、登録者を増やそうとは思っていないとのことでした。これは、日本サッカー協会はサッカーの強化と普及を目的としているので大きな違いだと思いましたが、既にブラジル全土に普及されているサッカーをあえて普及させる必要はないのだと理解しました。ただ、強化が目的である協会に、なぜアマチュア・リーグのクラブやチームが登録をするのかと尋ねたところ、協会に登録することで、様々な補助金や助成金を得ることができるので、協会に登録をしたいクラブやチームがあるといっていました。

◆スライド 44

これは、ミナス・ジェライス州サッカー協会が入っているビルのエントランスにある案内板で、選手協会なども入っていました。

◆スライド 45

4人目はセザール・バルボッサ氏(44)で、アカデミア・セザールの経営をしています。アカデミア・セザールは、フットサル場やトレーニングジムを運営するだけでなく、フットサル教室やトレーニング教室を運営しています。彼も、フットサル教室の運営・指導をしています。また彼自身、7~17歳までフットサルをして、17歳~アトレチコ・ミネイロやクルゼイロのユースチームに入り、あと一歩でプロ選手になれるところまでいきました。最終的にはプロにはなれず、いまの仕事を始めたとのことでした。

彼が子どもの頃は、週5日、総合型地域スポーツクラブでフットサルをしていましたが、それ以外にも友達と遊びのサッカーなどを楽しんでいたようです。今でも、仲間とつくったチームで、協会とは関係のない民間大会に参加してサッカーを楽しんでいます。そして、彼が指導するフットサル教室では、できるだけ子どもたちを遊ばせるようにしているといっています。ただ最近では、練習や指導をするように求めてくる親も多く、難しい状況だと話していました。

◆スライド 46

これは、アカデミア・セザールの施設の様子です。

◆スライド 47

これは、アカデミア・セザールの近くのフットサル施設で、上の2枚の写真と下の2枚の写真とは別の施設です。このような施設がたくさんありましたが、マリーニョさんによれば、このようなフットサル場は、必ず飲み食いできる場所があり、そこで儲けているといっていました。フットサルコートだけをレンタルするだけではなかなか儲からないので、フットサルをした後に、飲食スペースでアルコールや軽食を注文してもらうことで儲かるとのことでした。

こちらの下の写真の団体は、あまり飲食をしていなかったもので、店にとって良い客ではないと話していました。

◆スライド 48

最後の5人目は、グスタヴォ・オリベイラ氏(19)で、アトレチコ・ミネイロのユース選手です。あともう少しでプロになれるような話だったので、近い将来、アトレチコ・ミネイロの選手になって

いるかもしれません。また彼は、4人目のインタビューしたアカデミア・セザールのフットサル教室出身者です。

彼のサッカー観などを聞いたところ、サッカーが上手い＝偉い、下手＝馬鹿にされる、下手＝努力が足りない、真面目にトレーニングすることの方が遊びでサッカーをすることよりも価値が高い、などの価値観や意識はないとのことでした。

◆スライド 49

ここまでのインタビュー内容やマリーニョさんに解説していただいたことなどをまとめると、次のことがいえるかと思います。

まず、経済発展による遊び場の減少により、サッカーが弱くなってきていることがブラジルサッカーの現在の大きな問題であるということです。ここでサッカーが弱くなるというのは、マリーニョさんによれば、天才といわれるような、想像もつかないようなプレーをする選手がでてこないことを指しています。マリーニョさん自身も、15歳になって初めて練習をしたといいます。それまでは、とにかく遊びとしてサッカーをして、楽しむことが重要で、才能がある人だけがプロを目指して練習をするんだといいます。基本的にサッカーは楽しめれば良いものだが、プロ選手は仕事としてサッカーをしているので、厳しいトレーニングなどの辛いこともしなければならないという考え方のようです。

◆スライド 50

ここで、日本のサッカーについて簡単にみても、日本人のスポーツ観は、精神主義や遊びを忘れた勝敗主義だといわれてきました。また、大学運動部のレギュラーが補欠選手よりも社会的利益を得ることができると考えているというような研究結果や、大学運動部の方が同好会に比べて頑張っている、努力しているなどと評価されるというような社会的有用性があるという研究結果などもあります。実際に日本では、小さいころから練習やトレーニングをしている子どもが多くいます。これは、学校教育の問題も大きく関係していることですが、今回は時間がないので説明は省きます。

また、中塚理事長が体育学会でお話しされたように、補欠者や競技レベルが低い愛好者によるリーグ戦が日本サッカー協会に公認化されることによって環境は整備されたが、「上に合わせよう」、「きちんとやろう」という意識が強まり、「遊び心」が喪失してしまったという事例があります。さらに、これはマリーニョさんがよく話をされるのですが、日本のある地域での小学生のサッカー大会で、1人だけ間違えてメーカーの異なるソックスを履いてきてしまった際に、色は同じなのに規則だから出場できないということがありました。これは、小学生の大会で、サッカーを遊ぶべき年代として捉えたときに、有り得ない対応だと強く批判されていました。こういったことが日本人のサッカー観として考えられるのではないかと思います。

◆スライド 51

そしてこのような背景から、私自身の研究では、日本サッカー協会発行の機関誌を分析したり、日本人サッカー実施者に対するインタビュー調査をしたりして、日本サッカー界が、努力・練習・トレーニング・真面目に行うサッカーの価値が、遊びのサッカーの価値に比べて高く捉えられているのではないかということを描いています。特に、S氏というサッカー実施者へのインタビューでは、もし彼が人事採用者だったら、他の要素が全て同じだった場合、サークルでサッカーをしていた人よりも部活でサッカーをしていた人の方を評価するといいい、スポーツは「ちゃんと」やってこそ価値があると話していました。ここで、「ちゃんと」というのは、ヘラヘラ球を蹴っているというイメージのサークルとかでなくて、サッカーを真面目にやることとっていました。このようなスポーツ観、サッカー観というのが日本人の特徴だと考えています。

◆スライド 52

ここで、7月5日の朝日新聞で、W杯を視察したJリーグの村井チェアマンが、今後の日本サッカーには、指導者のいない遊びの空間をどうプログラムとして組み込んでいけるかがカギになるということを書いていたという記事がありました。

私はこの意見にとっても共感し、ブラジルサッカーの今の問題も考えると、とにかく一所懸命に努力して、真面目に練習・トレーニングをしていくよりも、遊びとして楽しくサッカーをしていくことが結局はサッカーの強化にもつながるのではないかと考えました。

◆スライド 53

時間がなくなってきたので、最後に少しだけドイツについてもお話させていただきます。この読売新聞の記事によれば、ドイツでは協会とリーグの関係が良好で、例えばW杯の報奨金のうち50%はリーグに配分され、さらに、そこから代表選手所属のクラブや彼らを育てた育成クラブに配分されるというシステムがあるといえます。ただ、このシステムをそのまま日本に導入すると、日本ではますます「遊び」がなくなり、そのお金を目当てにもっともっと厳しいトレーニングや努力というサッカーに偏重してしまう気がします。ドイツでは、ヨーロッパでは、スポーツは遊びとして捉えられている文化があるといわれていますが、そのような文化があるからこそ成り立つシステムではないかと思えます。

今回、ドイツがW杯優勝したわけですが、先ほどの「遊び」との関係を見てみると、ドイツでは10部くらいまでリーグが整備されていて、遊びというよりもほとんどの人がクラブに所属してサッカーをしています。

◆スライド 54、55、56、57

5部のアマチュアの試合にもたくさんのサポーターがいたり、1試合1,000円くらいの入場料をとったり、試合後には地元のテレビが監督インタビューにきたり、下部リーグまでしっかりとシステム化されています。スライド55の下の左側の写真は、観戦に来た人がソーセージを買っているところです。スライド55の下の右側の写真は、そのクラブハウスの2階のバーでアルコールを飲みながら地元の人たちが語り合っているところです。また、スライド56は7部と8部のチームをもつクラブですが、レストランのようなところがあるクラブハウスをもっています。そして、スライド57のように監督がいて、7部・8部でもしっかりとトレーニングをしています。

このような状況では、先ほどのブラジルの論理からいくと、遊びとしてのサッカーがなく、サッカーが弱くなってしまわないかと思えます。しかし今回のW杯で優勝しています。ただ、優勝したドイツからではなく、(いろいろと批判はありますが)メッシがMVPをとったというように、このようにシステム化されたドイツからは天才は出てこないとも考えることもできるかもしれません。

もう一つ、面白い事例があり、私がサッカー留学をしていた際のアマチュアチームの監督は、フスバル・レーラーといって、日本でいうとS級の資格を持った指導者だったのですが、ほとんどしっかりと練習をせずにゲームを多くやらせていました。私の日本人の友人が彼に、資格を持っているのになぜしっかりとメニューを考えてやらせないのか?と尋ねたところ、このチームは別にプロを目指しているわけではないし、楽しめればいいんだと回答していました。このように、しっかりとシステム化されていますが、レベルに合わせた指導により、「遊び」というものを確保しているとも考えられるのではないかと思います。

◆スライド 58

このように考えてくると、結局、サッカーはどうあるべきか、スポーツはどうあるべきか、ということにいきつくのではないかと思います。

◆スライド 59

そこで、最後にみなさんへの質問ですが、W杯では、守って守って守備を固めて、フリーキックやPKで勝つというような、つまらない内容でも勝てば良い(A)と思いますか？ それとも、W杯でも、観ている(応援している)ひとが楽しめれば(内容が良ければ)、負けても仕方ない(B)と思いますか？

私が非常勤講師をしているスポーツ関係の専門学校生20人にこの質問をしたところ、12人がA、8人がBでした。そして7月19日の朝日新聞には、Bの意見として捉えられる仏文学者の蓮實さんという方の記事が載っていたので、お時間のある方は是非一度読んでみていただければと思います。

◆スライド 60

以上、少し長くなってしまいましたが、また、まだあまりまとまっていない内容でしたが、お聞きいただきありがとうございました。

以上

このあと、飲み食いしながらのサッカー談義が延々と続いたのは言うまでもない